



## ⑩ 植物で測る中国

世間の話題は新型コロナばかりだ。日本からの支援物資をきっかけに、中国では日本見直し論が高まったが、日本のネット世界ではむしろ対中批判が渦巻く。だが日本の防疫対策も信じていたほどではなく、対岸から飛んできた火がこちらでも燃え上がりそうな状況だ。結局のところ、日中は運命共同体なのか。でも、今回はこの惨事から、しばし現実逃避したい。

### 沿岸で何が育つ？

1年あまり前、私は突然、福岡で海辺の土地を買ってしまった。かつて日本に禅宗を伝えた栄西が10年滞在した、昔の貿易港の近くだ。海沿いの遊歩道が気に入っていたので、その雰囲気を変えないよう、家を建てるとき遊歩道側は庭にしようと思った。庭は海からわずか2疔。

当前だが、塩害に強い植物の選定が欠かせない。実は、この土地の購入を夫と最終決断したとき、私は北海道大学の岩下明裕先生の「国境ツアー」で五島訪問中だった。バスガイドさんが、五島名産の椿は潮にも強く、海際でも育ちますと話していた。では、記念に五島の椿を植えよう。

外構屋さんを探し、さらには植木屋さんを訪ねた。相談すると、「その近さじゃ全部枯れる」。でもどうしてもと言うと、ヒトツバタゴという木を勧められた。対馬では韓国展望台の近くに群生し、5月には雪のような白い花でいっぱいになる。別名は「海照らし」。は

い、それにします！

帰りにご当地の園芸屋さんに寄る。尖閣ツツジという品種が目に入る。あの絶海の孤島で育つなら、うちだって大丈夫では？ ーまた

も採用だ。だが気付けば、これではまるで国境ガーデン。

### 中国の知恵を借りる

そう思うとだんだんハマってきた。ただ、私は昨年、6カ月間を中国で過ごしたため、中国で公園やよそ様のお宅をじろじろ見ながら、自分の庭に合う品種を探し続けることになった。

参考になったのは、日清戦争最終決戦の地、威海(衛)だ。日本では中国＝環境破壊、というイメージが強いが、中国人はかなり緑好きだ。威海は特にそうで、人々が海沿いのあちこちの建物に見事なつるバラを這わせていた。私がバラ＝「玫瑰」を褒めると、タクシーの女性運転手が、あれは「月季」だよと言う。同じバラの中でも、月季は棘が少なく花が大輪の中国バラで、香り重視の小バラ＝玫瑰や、西欧バラ＝「薔薇」とまったく違うのだそう。

だんだん調べていくと、興味深いことがわかった。梅や水仙、山吹、雪柳、沈丁花といった中国の古い品種は、私たちにもとても馴染みがある。

しかし、近代以降に中国

で品種改良が進んだような新しい植物は、日本にはあまり伝わっていない。明治以降の日本は、西洋のガーデンに憧(あこが)れ、そちらの植物を良としてきたらしい。だから月季の仲間で、日本で見られるのは江戸時代に伝わったモッコウバラくらいだ。

威海ではほかにも、海沿いではイチジクが他よりよく育つと聞いた。中国人は大の果物好きで、品種改良も盛ん。あと、わが家に採用できるのは柑橘類だ。中国の品種はとて多く、甘い。私は中国の「柚子」＝ザボンが大好きだが、検疫の問題で日本に直接は入れられない。いろいろ調べて、中国のザボンの原種になっていると思われる、タイの無酸文旦系の品種を入れた。小みかんも加える。

### 生活の質の潤い

植物に目配りするようになって気づいたのは、生活をこよなく愛する中国人たちは昨今も、香りのある植物を実にうまく活用している。金木犀はいろいろなスイーツの香り付けとして使われ、ジャスミン茶はより繊細な香りへと進化している。雲南省で産産されるようになった玫瑰エッセンスはケーキのクリームを華やかに彩り、将来は日本でもブレイクしそうなおしゃれさだ。あなどるなかれ。

植物のおかげで、今の中国の社会レベルを再認識するよいきっかけができた。しかし、せっかく庭が完成したのに、新型コロナで東アジアの人の流れは止まったまま。アジアの玄関、福岡のわが国境ガーデンに、中国からのお客さんを迎えられるのはいつになるだろう。その春が来たら、ここを交流の場として活用していきたい。

(益尾知佐子・九州大学比較社会文化研究院准教授)

# 国境ガーデンで春を待つ